



# 街全体が自宅の温かさ

童夢社長 林みのるさん

京都 私のお気に入り

まだベンチャービジネスなんて言葉も使われていなかった1978（昭和53）年、京都市左京区の宝ヶ池に、小さな会社が誕生した。町工場ほどの小さな作業場では、若者たちが朝から晩までアルミを曲げたり、木枠にパテを盛りつけたりしていた。

この会社こそが、日本唯一のレーシングカー・コンストラクター「童夢」。以来、約30年、国内レース界はもちろん、ル・マン、F1への挑戦を続けてきた。

京都から世界へ、それも最先端のハイテクを競うレースの世界というのがおもしろい。

「レースをするなら海外で、たとえば英国で、という選択もあった。京都でなきゃ、という深い理由があったわけではないけれど、結果的には、自分が生まれて育ち、知り合いも多い京都という街を出たくなかったんだろうね」

少年時代から模型やラジコンに熱中。年齢とともに興味の対象は、バイク、車へと向かった。78年に発表した和製スーパーカー「童夢零」は、おりからのブームもあって一世を風靡した。その後はトヨタのグループCカー開発で国内レースデビュー。ル・マン耐久レースへの挑戦は今年で15回目となる。

レースがビジネスとして成立しにくいといわれる日本で、こうした活動を続けること自体、生半可なことではないが、本人は「死ぬほど好きなものがある、ただそれに向かって転がってきただけ」といってクールだ。

仕事柄、海外出張も多いが、「京都に帰ってきて、一歩足を踏み入れただけで、たとえそれが祇園であっても、京都駅であっても、ほっとする。街自体がまるでわが家のような感じ」と話す。

それは京都に生まれ育った人だけが感じる、ある種、皮膚感覚のようなものかもしれない。伝統か、歴史か。一言では言えないが、確かに、京都には、殺伐とした他の大都市が失ってしまった人の営みが残っている。それが住む人だけでなく、多くの観光客をひきつける魅力にもなっているのだろう。

最近、いったんは手放した宝ヶ池の旧本社を買戻した。一種の「記念館」的な存在として残していきたいという。

「本当はそこをお気に入りのしよかな、と思ったんだけど、お気に入りというよりメモリアルな場所かな」

そういって自宅裏に流れる賀茂川を「お気に入り」に挙げてくれた。「自宅の延長というのかな。桜の季節には、毎年仲間が集まってここで花見をするんですよ。もうそろそろだね」

満開の桜を想像するように、目を細めた。

文 井上雅雄  
写真 塚本健一



賀茂川 京都を南北に流れる鴨川の、高野川と合流する出町柳以北を、通称・賀茂川(加茂川)と呼ぶ。春には北大路通―北山通の堤防道にシダレザクラが咲き、四季折々の自然美が見られる散策ルートとして人気がある。



はやし・みのる 1945（昭和20）年、京都市生まれ。19歳のとき、夭逝（ようせい）した天才レーサー、浮谷東次郎（うきやとうじろう）と知り合い、その依頼でホンダS600を改造したレーシングカーを製作。本格的なレースの世界に。「童夢」設立後は国内外のレースにコンストラクターとして参加。2001年には経営基盤を強固にするため「童夢カーボンマジック」を設立。航空機やバイク部品などを製造している。